南アジア・イスラーム研究の意義と眺望

山根　聡*

大阪外国語大学の山根と申します。今日はこのような場で話す機会を与えていただきましてありがとうございます。私自身はウルドゥー文学を専門にしております。

先ほど東長先生が雪に因んだすてきなお話をされたので、私も少しだけ。今日河原町で降りて鴨川を渡っていると、北の山に雪が積もっていました。私が高校の頃に読んだ大好きな本に岩波文庫の『北越雪譜』という新潟の雪のことを書いた本があります。雪の結晶を筆で綺麗に一つ一つ書いている美しい本なのですが、上方や江戸の人が雪のことを美しいと思うけれど実は雪というのは本当に大変で、新潟の人たちはこんなに苦しんでいるのだといったことが書いてあります。ふとそのことを思い出しました。

雪も視点が異なると違って見えるわけですが、南アジアのイスラームもまた、視点によって異なります。「南アジアのイスラーム」というイメージは、田舎のイスラームとか周縁的なものというイメージがあるかもしれませんが、今日は KIAS の設立ということで、南アジアのイスラームがどれだけ面白いか、また取り組むべき課題がどれだけたくさんあるかということをお話できればと思います。

まず南アジアがどこの地域を指すかですが、地理的にはヒマラヤ、ヒンドゥークシュ、カラコルムなどの山脈から南の辺りを指しますが、国の名前で言いますと、SAARC(南アジア地域諸国連合) に加盟しているインド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、モルディブ、ブータン、ネパールの 7 カ国を含む地域を指します。ただし日本政府では南西アジアという呼称でこれらの国々が入っていますが、アメリカだとこれにアフガニスタンが入ります。ですからさきほどの 7 カ国に限定せず、その周辺国を含んで考えた方がいいと思っています。先ほど小杉先生のお話にも出ましたが、全世界には 13 億人、総人口の 5 人に 1 人がムスリムになっていますが、南アジアには 4 億人を超える、世界でももっとも多くのムスリムが住んでいる地域であります。人口が多いだけではムスリム社会において重要であるとは言えないのですが、南アジア系の人たちは移民として世界中に散らばっています。この移民たちは英語やウルドゥー語で新聞や雑誌或いはインターネットなどを通じて、薄く膜を張るように世界中に散らばっていて、そこで独自の情報交換をしている。それが同時的で、どこかで何かが起こるとすぐにお互いが反応し、共振するといった特徴を持っています。例えば、一昨年に起こったムハンマドの風刺画に対するデモの場合、デンマークのパキスタン系の移民が主たる役割を果たし、同時にパキスタンのラーホールでマクドナルドが西洋文化の象徴として襲撃されました。このようにネットを通じて共時的に体験を共有している南アジア系の人たちのネットワークは、実はかなり広がっています。さらに、18、19 世紀頃から南アジアのムスリムによる思想家や運動家たちの書いたものがアラビア語や英語などに訳されて世界各地のイスラーム復興に少なからず影響を与えてもいます。また南アジアから発信するだけでなく、南アジアに集

* 京都大学イスラーム地域研究センター拠点研究員
大阪外国語大学外国語学部

まるムスリムもいるわけです。私は80年代の終わりにパキスタンへ留学していたのですが、当時インドネシア、マレーシア、アフリカ、それから中東諸国、中央アジアといった地域から留学生がずいぶんやってきており、化学やイスラーム学を学んでいました。彼らは留学後、同窓ということで繋がり合っています。このような状況を見ると、南アジアというのは実はムスリム社会に対し発信性の高い地域だと考えています。さらには、1970年代後半から80年代、アフガニスタンで展開された対ソ連戦争の頃、中東や東南アジアのムスリムがこの戦争に参加するため、前線であるパキスタンに集まっていました。80年代の終わり、まだアフガニスタンにナジーブッラー大統領によるソ連寄りの政権があった頃、パキスタン人の私の同級生は1週間だけ戦争に行き、また帰って授業に出ていましたが、そのような人たちがいた時代でした。パキスタン、或いは南アジアという地域は、世界で起こる様々なイスラームに関する現象に対して一種の拠点のように機能していたことがあります。

・南アジアのイスラーム

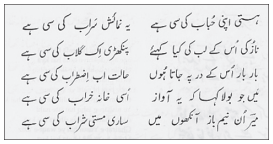
610頃　ムハンマド、啓示を受ける
622　マッカからマディーナへヒジュラ(聖遷)
712　ムスリム、北西インドに進出
962　アフガニスタンでガズナ朝成立
1000　北インドにガズナ勢力侵入
1206　インドで奴隷王朝樹立、ムスリム政権成立
1227　チャガタイ・ハン国
1510　ポルトガル、ゴアに進出
1526　バーブル、ムガル朝を興す
1542　ザビエル、ゴアで布教
1556　アクバル大帝
1600　イギリス東インド会社設立
1602　オランダ東インド会社設立
1604　フランス東インド会社設立
1632　タージ・マハル建設開始(53年完成)
1707　アウラングゼーブ帝死去、ムガル帝国混乱
1757　プラッシーの戦い
1804　イギリス、ムガル朝を保護国化
1857　インド大反乱(セポイの反乱)
1858　イギリスによる直接統治開始
1860年代　イギリスで第2次産業革命
　デーオバンド学院設立
1870年代　アリーガル運動
1877　ヴィクトリア女王、インド皇帝を宣言
1919　ヒラーファト運動開始(反英運動)
1926　タブリーギー・ジャマーアト設立
1940　ムスリム連盟によるパキスタン決議
1941　ジャマーアテ・イスラーミー創立
1947　インド、パキスタン独立　第1次印パ戦争
1956　第2次印パ戦争
1971　第3次印パ戦争、バングラデシュ独立
1979　ソ連軍、アフガニスタンに侵攻(対ソ連戦争)
1991　湾岸戦争
1996　アフガニスタンでターリバーン政権樹立
1998　インドとパキスタンが核実験
2001　同時多発テロ、ターリバーン政権崩壊

南アジアのイスラーム

この南アジアのイスラームについて、歴史は皆さんもご存知だと思いますので端折ってお話したいと思います。

最初にイスラームが紹介されたのは711年のことだと言われています。これはムハンマド・ビン・カーシムという人物が海路で現在のパキスタンのスィンドに入ってきたのですが、これは実は一回きりのことでありまして、南アジアにムスリム政権が樹立されたこととは直接関係がありません。南アジアで本格的にイスラーム化が始まったのは10世紀以降のことであり、10世紀末のガズナ朝成立以来、奴隷王朝やハルジー朝、ロディー朝、或いはムガル朝のようなムスリムの政権が誕生しました。

そこで細密画やウルドゥー語、或いは南アジア独特のイスラーム的建築様式などが花開いたわけ


ہستی اپنی حباب کی سی ہے　　یہ نمائش سراب کی سی ہے
نازکی اُس کے لب کی کیا کہیے　　پنکھڑی اِک گلاب کی سی ہے
بار بار اُس کے در پہ جاتا ہوں　　حالت اب اضطراب کی سی ہے
میں جو بولا کہا کہ یہ آواز　　اُسی خانہ خراب کی سی ہے
میر اُن نیم باز آنکھوں میں　　ساری مستی شراب کی سی ہے

南アジアのイスラーム文化
細密画とウルドゥー語、インド・イスラーム建築

です。これをインド・イスラーム文化と言いますが、これは文化と政治的権力がうまく結びついた時期だったといえます。

その後 18 世紀に入るとムガル朝では皇位継承権を巡る争いや、インド各地で諸勢力が勃興して中央政権を圧迫するなど、社会がガタついてきました。その頃、ムスリム社会の改革を提唱するシャー・ワリーウッラーという思想家が生まれたのです。シャー・ワリーウッラーは 1703 年に生まれて、ナクシュバンディー教団の学院でイスラーム学を修め、マディーナで学んだと言われています。ワリーウッラーはスーフィー教団における逸脱的な信仰の実践に対して批判した点で、小杉先生はこれを、伝統の継承から改革に移行するイスラーム史における代表的な活動であったと評価しておられます。要するに 18 世紀の南アジアというところがタジュディード、すなわち革新、刷新という点で先端的役割を果たしていたと評価するのです。再イスラーム化やスーフィー批判などは、先程東長先生のお話にあったように、刷新を唱えるムスリム自身が、スーフィー教団の中に関わっていたという点がありますが、シンクレティズムと言えるような、ヒンドゥー的な要素や南アジア的な要素を排除しようとする再イスラーム化の動きが、自分達の中から主体的に生まれてきているという点が重要だと思います。南アジアのイスラームの動きには、自らを変えようとする主体的な動きがいくつもあり、それがすでに 18 世紀にあったということがおもしろいと思います。こういった改革の動きについて、「南アジアで見られた」という評価だけで終わるのでなく、イスラーム史全体の中で位置付ける、という作業はあまりやられていないと思います。ありがたいことにシャー・ワリーウッラーの文献は東長先生のお手元に随分あるということですので、これから色々とお教えいただきたいと思っています。

また、南アジアのイスラームに関しては小杉先生が二重の周縁性を指摘されました。二重の周縁性とは、まず一つは南アジアの中でムスリムが常にヒンドゥーにとっての少数派と捉えられている点です。実際にはパキスタンに 1.4 億、バングラデシュに 1.4 億、インドに 1 億、合計 4 億近くのムスリムがいるわけですが、この 4 億を少数と捉えてしまっていいのかどうか。イスラーム世界にとっては大きな数を占めています。また、インドとパキスタンが分離独立して以降、南アジアにおけるイスラームというと、私たち研究者の反省もありますが、パキスタンかバングラデシュだというイメージがあるわけです。その結果、パキスタンやバングラデシュのイスラームに関する研究は随分ありますが、インドに 1 億人以上のムスリムがいて、色々な事例があるにもかかわらず、インドのイスラーム研究はほとんどなされていない。これは京大におられた小牧幸代さんがやっておられましたが、インド・ムスリムの研究はこれからなされるべき課題だと思います。それからもう一つの周縁性とは、やはりパキスタンや南インドやバングラデシュのムスリムというのはアラブ圏でない、「南アジア」という周縁に位置する、という点です。しかし実は非アラブ社会、すなわち南アジアや東南アジアが、多くのムスリム人口を抱えてていて、この非アラブ世界で主導的な役割を

担っているのが南アジアのムスリムなのです。東南アジアやイラン、アフガニスタンのムスリムはパキスタンやインドに留学し、インドやパキスタンで出ている書物を翻訳で読んで思想的に随分影響を受けています。そういう意味で、非アラブ世界では独自のムスリムのネットワークが南アジアを中心に広がっていることを指摘しておきたいと思います。それから、もう一つ指摘しておきたいことは、非アラブ世界と言いますが、近代以前の、ムガル朝までは、南アジアでの文語はアラビア語かペルシア語だったのです。したがってムガル朝までの南アジアのムスリムはアラビア語やペルシア語で書くことを当たり前と思っていました。話し言葉はウルドゥー語などでしたので、言文一致は無かったわけです。従ってシャー・ワリーウッラーにしろ、スーフィー達にしろ、当時はアラビア語やペルシア語で書くというのが当然だったわけです。彼らの多くは中央アジアやイラクなどに学びに行っていました。ムガル期までの南アジアのムスリムの学者やスーフィーたちは自由に西アジアに学び、アラビア語やペルシア語を駆使していました。その意味で南アジアのムスリムは国際性に富んでいたと考えて良いと思います。言文一致が19世紀以降に始まり、ウルドゥー語の出版が可能となってきた時に、アラビア語やペルシア語を知らないムスリムに対してもイスラーム復興や改革などが唱えられるようになってきたのでした。

このような事例について、「南アジア的なイスラーム」という言い方で立ち止まってしまうと、今後の研究の発展性はないと思います。これからはイスラーム全体のダイナミズムのなかで考えていくべきだろうと思います。シャー・ワリーウッラーはもちろん、19世紀には色々な改革運動が南アジアで展開されました。その改革は二通りあります。一つは西洋的な科学を受け入れながらムスリムの社会的地位向上を図ろうという、「アリーガル運動」などに代表されるものです。それに対して、植民地支配からの脱却を唱えるムジャーヒディーン運動やヒラーファト運動などもあります。さらに、デーオバンド学院やタブリーギー・ジャマーアトのような、現在も続いている改革や布教の動きも起こりました。現在私は、このデーオバンド学院に関心を寄せています。これは19世紀の後半に改革派のウラマーによって作られたハナフィー派の学院ですが、南アジアの各地に、それまでの小さなマドラサではなく、教育や財務、出版などを体系だてた学校を作りました。そして多くの「ファトワー」と呼ばれる意見書を出して再イスラーム化を実践しました。これが何故おもしろいかと言いますと、時代にうまく合っていたと思うからです。つまり、デーオバンド学院が発展した時代の背景にはまず言文一致があったと考えます。南アジアでの言文一致は19世紀の半ばに本格化しましたが、デーオバンド学院は、ウルドゥー語の平易な文体でファトワーを出しました。例えばこの肉は食べるべきか、スプーン、フォークは使うべきか、あるいはイギリス軍で働くべきかなど色々なことのファトワーを大量に出していった。そこには、印刷技術と印刷物を流通させる交通網の発達も背景にありました。この言文一致と出版技術の活性化が、ムスリムのネットワークを急速に広げたと考えています。雑誌媒体を使って再イスラーム化を図るという動きをデーオバンドはいち早く南アジアで取り入れたのではないでしょうか。デーオバンド学院の出身者が興したタブリーギー・ジャマーアトの布教活動や、アリー・アシュラフ・ターナヴィーという人物の書いた『天国の装身具』というムスリム女性の指南書が多くのムスリムの間に広まったことも、時代の流れに合致していたと考えています。おもしろいことに、デーオバンド設立当時の主旨を見ますと、シャー・ワリーウッラーと自分たちが繋がっていることが強調されているのです。彼らは自分達のイスラーム改革の正統化を主張しつつ、大衆に再イスラーム化を図っていたのでした。

このようなメディアを使ったイスラーム復興や改革は、現在においても、例えばデーオバンド学院が今のパキスタンの西側、アフガニスタンとの国境、イランとの国境辺りに随分あって、これが

ターリバーンの中核メンバーの出身地になり、彼らが、ファトワーを多く出すというデーオバンド的な方法をとっていた、といった動きに見られます。また多くの雑誌媒体、或いはメディアを通して意見を出す方法は、先ほど最初に申しましたインターネットでのネットワークとも共通していると考えています。

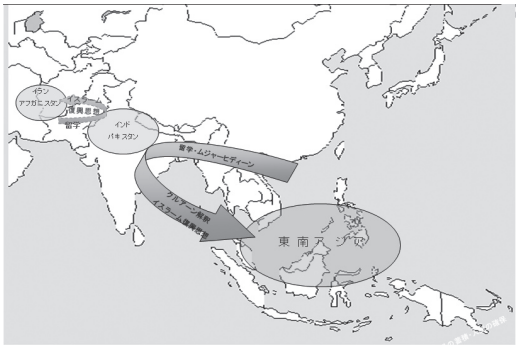
このような意味で、南アジアのイスラームは地域的な、周縁的な存在のようで、実は非常に発信性の高い、超域的な存在であるということをお話しておきたいと思います。現代史においては、イギリスから独立する時、イスラームという宗教の名のもとに国家ができたという点で大きな意味を持っていると思います。かつて小杉先生が指摘されていたと記憶していますが、独立時、現在のインドに住んでいたムスリムは、パキスタンへ移住したのですが、20 世紀の民族自決主義がうたわれていた時期に、宗教の名のもとに新しい土地への移住をやったわけです。南アジアでは、パキスタン独立の約 20 年前にも、「もはや植民地インドはイギリスの植民地であってイスラームの地ではない、従ってイスラームの地であるアフガニスタンに移住しよう」と呼びかけた人物がいました。それで皆アフガニスタンに移動したのですが、アフガニスタン側が国境を閉めたために、2 万人程が亡くなったことがありました。また、パキスタン独立時にカラーチーに移住したムスリムは自分たちのことを「ムハージル」と呼び、自分たちがインドからパキスタンに移ったことをヒジュラという呼び方をしている。このようなことが現代に行われているということはイスラーム史上非常におもしろい例だと思います。イスラームに関して他の興味深い例では、パキスタンで憲法を制定する際、ジャマーアテ・イスラーミーという 1941 年にマウドゥーディーが作った団体が大々的な運動を行い、「主権はアッラーにのみ存する」という一文を憲法前文に入れさせました。これは現在も明文化されています。しかしその後、1950 年代の終わりになるとアイユーブ・ハーンによる軍事政権ではファズルル・ラフマーンという学者がイスラーム・ネオ・モダニズムを唱え、パキスタンの国名がイスラーム共和国から共和国になったり、1961 年のムスリム家族法では一夫多妻制や離婚、婚資の支払方法に制限を与えたりしたのです。つまり国家としてパキスタンは、国家の法とイスラーム法との間でせめぎあってきました。続くズルフィカール・アリー・ブットー時代には禁酒となり、ズィヤーウル・ハック政権ではザカートの強制徴収があるなど、パキスタンは世俗化とイスラーム化の間で揺れてきたのです。このような「揺れ」はバングラデシュでも続いています。こうした動きについて、南アジア研究では随分研究成果がありますが、イスラーム史全体からの視点はあまり無かったと思います。

それから、南アジアのイスラームを研究するにあたって、研究者自身の地域へのかかわり方という点も重要だと思います。昨年私は 3 ヶ月程パキスタンにいましたが、今回、首都のイスラマバードでお酒がこんなに自由に飲めるのかと驚きました。今まではどこかお金持ちの家などに行くと飲めたのですが、今はレストランで店員の方から「お酒を飲みますか」とわざわざ聞いてきて、「ノンアルコールか」と聞いたら「アルコールだ」と言って、ビールの缶が出てくるのです。これに私自身がすごく違和感を覚えてしまいました。私自身は大学に入ったのが 1982 年で、ズィヤーウル・ハック政権の頃だったのです。留学していた頃もズィヤー政権の名残りがあったため、パキスタンでは酒が飲めず、女性がスカートを穿かないというのが当たり前だという環境で私は育ってきました。そうするとその頃の記憶が自分の中に残ってしまっていて、酒が自由に飲めるパキスタンというのがどうも不思議な感じがするのです。これは私自身のパキスタンに対するかかわり方、という問題といえます。今日の会場に、南アジア地域を専門にされている方がどれだけいらっしゃるのか分からないのですが、南アジアのイスラームについて、他からの視点でご意見をいただければ、そ

れは私のように南アジアにどっぷり浸かってしまった者には新鮮になりますし、そのようなことができるのがこの研究センターの良いところだと思っています。

また南アジアへの視点としては、パキスタンが対テロ戦争の前線国家として意味を持っていることや、98年の核実験によって、イスラーム諸国で唯一の核保有国という地位も与えられているといった、国際関係の中で南アジアのイスラームを捉え直すことも重要だと思います。

非アラブ地域におけるイスラーム復興と人的ネットワークの解明



それから最初に話しましたが、南アジアは、非アラブ地域で拠点としての役割を果たしています。つまり東南アジアやイラン、アフガニスタンから多くの学生達が留学している、或いはアフガニスタンでの戦争に参加するためにパキスタン経由でアフガニスタンに入ったムスリムがいたわけです。彼らはマウドゥーディーの書物や、インドのナドワトゥルウラマーから出ている書籍を持ち帰ります。東南アジアのホテルに置いてあるクルアーンの英訳は、1930年代にインドのユースフというムスリムが翻訳したものです。東南アジアの書店で英語でのイスラーム関係の本を買おうと思うと、大体はインドやパキスタンで刊行されたものの英語版です。ですから非アラブ地域では、復興思想や人的ネットワークが南アジアを拠点として広がっているという点は解明されるべきだと思います。

それからウルドゥー語のメディアについても先程少しお話しましたが、世界各地に南アジア系の人たちは広まっています。私も移民たちのメイリングリストに入っていますが、毎日20通、30通と色々な議論が世界中から英語で届きます。インターネットでは英語が便利であって、ウルドゥーでは手間もかかるし、ソフトが違うと読めないために、英語でやりとりするわけです。このメイリングリストは、英語で書かれ、世界中をカバーしているのだけれど、メイリングリストそのものは、参加条件が課せられています。だからこのネットワークは、グローバルなのだけれど極めて限定されているという特徴を持っています。ましてやウルドゥー語のネットワークとなると更に限定され、南アジア系、或いはウルドゥー語が読める人たちだけに共有されている。限定的だけど、同時性が非常に強く、時代に敏感に共振するネットワークであるということを考えると、やはりこのネットワークの調査は非常におもしろいと思います。ただし、これは常に過激な行動と繋がっているというわけではなく、例えば預言者の風刺画の場合には、冷静になろうという議論も随分あったわけです。ですから彼らがサイバーメディアを通してどのような議論をしているのか、それがどこまで広がっていて、実際の行動とどれだけ関連性があるのかということもフォローしなければいけないと思います。他にも、南アジアのイスラームにつ

いては、サルマン・ラシュディをめぐる議論や、パンジャーブ地方で始まったアフマディーヤに対する動き、つまりアフマディーヤがどうかということではなく、マウドーディーらがどのような批判を行ったか、それをイスラーム全体のダイナミズムというような点で捉えるといったいことを考えると、これからやらなければいけないことがたくさんあると思います。さらに、少数派と呼ばれるイスマーイール派については、京都大学におられた子島さんがイスラームと開発という視点で研究成果を発表しておられますが、今後も進めるべき課題であると思います。また、イスラーム経済という視点では、ズィヤーによるザカートの強制徴収、或いは 1970 年代にパキスタンが先駆的に設立したイスラーム銀行などについても、研究される方が出てくれば良いと思っています。本日は、南アジアのイスラーム研究の意義と眺望ということでお話していますが、南アジアでの事例について、個別には優れた研究蓄積があったわけですが、それをイスラーム全体の中で再検討することも重要だと思います。

南アジアのイスラームに関する研究は、大阪外国語大学に居られた加賀谷寛先生が先駆的にしておられましたが、それ以降蓄積はあまり無いと思われますので、KIAS ではここを強化する必要があろうかと思います。

さて、先程東長先生がどうしてスーフィズムをやり始めたかという話をされて、子供の頃から志されたというのはすごいと思いましたが、最後に、私がなぜウルドゥー語の勉強を志したかを話そうと思います。私は高校３年生の時、世界史が好きだったので世界史を選択したのですが、この世界史の先生が非常にマニアックな方で、一年間インドとイスラームしか教えてくれなかったのです。当時のノートを今も研究室に大切に残していますが、岩波新書の蒲生先生の『イスラーム』など、高校生向けの色々な本を紹介されながら、ある時、『西南アジア研究』という学術誌のコピーを持って来られたのです。ちょうどガズナ朝をやっていた頃で、「教科書にはガズニと書いてあるがこれはガズナだ」と言われるわけです。「何故かと言うとこれは外大の加賀谷という人がこの論文で書いている、ニをナにするだけでこれだけ読まなければいけない」と言われて、格好いいな、と思ったのです。当時は 81 年でしたからちょうどアフガニスタンで対ソ連戦争が続いていた頃で、その世界史の先生は、「戦争が終わったら、生きているうちにガズナに行きたい」とも仰っていました。「ガズナは美しい町らしいんだ、あんな戦争をやっているのは馬鹿馬鹿しい、ああいう町は残すべきなんだ」というようなことを仰っていて、私はおもしろいと思い、まず南アジアに興味を持ったのです。ついでに、この頃、松任谷由実の「水の中のアジアへ」というコンサートで、ステージの背景にアラビア語が出て、これまた格好良いと思ったのでした。その二つが理由です。まあ理由はどうあれ、皆さんもイスラーム研究を志しておられると思いますが、南アジアというのは非常にエネルギーに満ちたおもしろい場所です。18 世紀のうちからシャー・ワリーウッラーのような人物を生み、19 世紀になるとイスラーム復興、再イスラーム化でネットワークをどんどん広げ、20 世紀になるとサイバーメディアを使って移民社会に溶け込んで常に発信している、非常にエネルギーのある地域です。ですから皆さんに関心を持っていただければ、イスラームの復興思想やメディアを中心としたネットワークの解明、或いは KIAS で研究されようとしている、ムスリムによる国際組織の実態解明などで新たな知見を提供できるのではないかと思います。私たちは南アジア学会で研究成果を発表しているわけですが、今後は、南アジア研究とイスラーム研究が本格的に融合できるのではないか、そういう期待を持ってお話を終わりたいと思います。